

近年、理学療法のルーツとも言うべき「物理療法」の適応範囲は広がりつつあり、EBM への関心の高まりから、その作用機序の解明、臨床効果の検証などがなされてきている。物理療法が有効であることは全体としては認められているが、個別の適用に関してはさらに検証が必要である。本特集では実際に物理療法を適用する際、どのような場合に「有効性」があり、どのようなリスクが考えられるのかについて具体的な対処法を例示して論じていただく。

■物理療法の有効性とリスク管理(杉元雅晴論文)

物理療法で標的細胞や組織を刺激する適切な時期や刺激強度を解明し、作用機序を検討していくことにより、有効性は明確になり危険性は通減する。物理療法を実施する過程で発生する問題点を改善すれば、効果的なリスク管理となる。また、防止できなかった医療事故には、患者への傷害を最小限にとどめるための安全管理が遵守されれば、安心した物理療法が実施できる。

■電気刺激療法の有効性とリスク管理(烏野 大, 他論文)

電気刺激療法では、多種の刺激波形が利用されている。また各パラメータを変更することで、得られる神経生理学的反応も変わることが言われている。電気刺激療法の主な効果は、①鎮痛効果、②浮腫の改善、③筋緊張の緩和、④関節可動域の改善、⑤筋力増強、⑥歩行機能の改善などである。電気刺激療法を用いる際には、刺激方法だけでなく治療器から実際に出力されている電流波形についても管理することがリスク軽減に繋がる最も良い方法である。

■超音波療法の有効性とリスク管理(木山喬博論文)

理学療法で使用する超音波は温熱作用と非温熱作用による効果に大別され、両作用に関連の深いデータを交えて紹介した。超音波照射時の発熱によるリスク管理の基本的留意事項については、超音波吸収発熱の大きい骨の存在位置を考慮することが重要であり、関連の深いものを紹介した。最近、非温熱作用による効果を期待して、低出力や間歇波での照射が推奨されているが、具体的な記述が少ないのでデータの紹介に努めた。また、超音波の新しい利用技術の一部を紹介した。

■温熱療法の有効性とリスク管理(岡崎大資, 他論文)

物理療法のリスク管理において身体的リスクは多くの指摘が存在するが、物理療法を受療することによる心理的・社会的リスクについて取り上げられることはほとんどない。本稿では温熱療法実施時の身体的リスク管理として、パラフィン浴実施時の熱傷危険性について再考した。また後半で、慢性期疾患を有する者が温熱療法を継続的に実施することによって生じる心理的・社会的リスクを考えることとした。

■寒冷療法の有効性とリスク管理(小林寛和, 他論文)

寒冷療法は、急性期の患部への処置から日常的な身体的コンディショニングに至るまで様々な目的をもって活用されている。痛みや腫脹に対して効果的であるが、その作用機序については不明瞭な点も多い。過去の実験的研究の結果からも、寒冷療法に関する evidence は十分とはいいがたく、より精度の高い検討を要する段階にある。本稿では、寒冷療法の作用機序と有効性について、文献的な考察をもとに解説したい。